

「博士論文」 合否査定資料

申請者
職・氏名 千代間 泉

学位の名称 博士（日本語日本文化）

論文名 英文ガイドブックの視点による国際観光黎明期の研究
—明治期における京都観光の文化史的考察—

審査委員 主 査 吉海 直人

副 査 森山 由紀子




副 査 A. エリオット

審査結果 合

2022.9.8 日本語日本文化専攻博士後期課程委員会 承認
2022.9.8 文学研究科博士後期課程委員会 承認

博士学位論文審査結果報告書

2022年 8月 4日

学位申請者	千代間 泉		
審査委員	主査	吉海直人	
	副査	森山由紀子	
	副査	A. エリオット	

本学大学院生の千代間泉から「英文ガイドブックの視点による国際観光黎明期の研究—明治期における京都観光の文化史的考察—」という論文名で、博士の学位の申請があった。論文はA4用紙178枚の力作である。これを受けて会議を開催し、主査・吉海、副査・森山、副査・エリオットの三名で審査にあたることになった。

まず申請に必要な条件（査読付き学会誌掲載など）は、「日本国際観光学会論文集」及び「英学史研究」に論文が掲載されていることで基準を十分満たしていることを確認した。その上で、8月4日に公開の口頭試問会を開催し、各委員との忌憚のない質疑応答が行われたことを報告しておく。




申請論文は序論に続いて9章の論文から構成されている。それを大きく分けると、前半は明治初期に刊行されている英文京都観光案内の書誌を含めた研究である。最初に山本覚馬の英文『京都とその近郊の案内』、次にキーリングの『ツーリストガイド』、そして三番目が『ストレイノート』である。この三冊の初版から改訂版に至る書誌的研究は、従来の研究史を飛躍的に進展させるものであった。その上で三冊の比較研究が行われており、その成果はまさに京都の国際観光黎明期の基礎的研究の基盤を形成するものといえる。

後半は具体例として、まず「英国皇孫京都観光」の詳細を、前半の資料にアーネスト・サトウの日記や当時の新聞などを加えて、その旅行の内実を明らかにしている。その上で京都国際観光の始まりのトピックスとして、外国人がいかに関心を持って「保津川下り」を楽しんだかを、解明している。次に「伏見稲荷大社」が国際観光名所として確立する過程を浮かび上がらせている。これらは従来にない斬新な視点からの研究であり、高く評価される。

以上、千代間の論文は明治初期の外国人による国際観光の実態を、英文のガイドブックを分析して見事に描き出したものである。審査委員は全員一致で千代間泉の申請論文に対して、博士（日本語日本文化）の学位を授与するに値するものと認定した。今後なるべく早くこの成果を研究書として出版してもらいたい。

博士学位論文内容要旨

2022年 8月 4日

学位申請者	千代間泉		
審査委員	主査	吉海直人	
	副査	森山由紀子	
	副査	A. エリオット	

(要旨)

本学大学院生の千代間泉から提出された学位申請論文「英文ガイドブックの視点による国際観光黎明期の研究—明治期における京都観光の文化史的考察—」(A4用紙178枚)は、以下のような構成(目次)になっている。

序論

第1章 [資料翻刻] 山本覚馬著英文『京都とその近郊の名所案内』(1873)

第2章 日本初の英文京都ガイドブックの制作背景と改訂についての研究

第3章 出版者丹羽圭介の視点による山本覚馬著英文『京都とその近郊の名所案内』

第4章 [資料翻刻] W. E. L. Keeling 編纂『横浜、東京、、、京都へのツーリストガイド』(1880)の京都記述部分

第5章 KeelingのTourists' Guide (1880)についての研究

第6章 Stray Notes on Kyoto and Its Environs. (1874, 1876, 1878)についての研究

第7章 英国皇孫京都観光(1881)に関する研究

第8章 「保津川下り」国際観光の始まりと発展

第9章 「伏見稲荷大社」西洋人観光の始まりと発展

終論

タイトルが示しているように、本論は明治初期に英語で書かれた京都観光ガイドブックを資料として、国際観光の黎明期に焦点を絞って研究したものである。京都は日本の首都として、古くから観光地として栄えてきたが、戊辰戦争による荒廃と東京遷都によって、大きな打撃を受けた。そこで一刻も早い京都の復興策として、京都博覧会が開催され、外国人を誘致することにより、産業の発展と国際観光への道が開かれた。

本論は初期の英文ガイドブックとして、山本覚馬の英文『京都とその近郊の案内』、キーリングの『ツーリストガイド』、『ストレイブック』の三種をあげ、その詳細な検討比較を通して、数多くの発見をしている。まず同志社が所蔵している本は、鉄道の駅が記されていることによって明治十年以降の改訂再版であることをつきとめ、そこから宇治市歴史資料館や歴彩館に所蔵されている初版本を活用して論を展開している。なお著者の山本覚馬は京都の復興の一環として京都博覧会を計画し、そこにやってくる外国人のために英文ガイドブックを制作したわけだが、あえて活版印刷にしたこと、挿絵を銅版画にしたことは、日本の技術が欧米に劣らないことを見せつけるためであったというのも興味深い。また出版者である丹羽圭介についても資料を掘り起こして論じている点、丹羽圭介研究を躍進させる内容である。




それ続く『ストレイノート』(SN)とキーリングの『ツーリストガイド』(TG)についても、初版本を発見・活用することによって、従来の説を是正し、TGはSNをダイジェスト化したものと論じている点は高く評価できる成果である。

続いて各論として、京都観光の具体例として「保津川下り」と「伏見稻荷大社」を設定し、それを国際観光の始まりとしている点も独自性のあるユニークな論である。特に「保津川下り」についてはアーネスト・サトウの日記や『ハンドブックフォートラベラーズ』(HT)などから、西洋人の京都観光モデルとして保津川下りが確立したことを論じている。

本論は京都観光黎明期の基礎的研究であるが、どの章にも千代間の知見が提起されており、教えられることが多かった。よって本研究は博士の学位に値するものと認められる。今後のさらなる研究の進展を期待したい。

博士学位論文審査結果要旨

2022年 8月 4日

学位申請者	千代間 泉		
審査委員	主査	吉海 直人	
	副査	森山 由紀子	
	副査	A. エリオット	
論文題名			
英文ガイドブックの視点による国際観光黎明期の研究 — 明治期における京都観光の文化史的考察 —			
(要旨)			
<p>千代間泉は、通訳案内士（英語）の資格を有して既に京都観光通訳として活躍している。また博士課程前期（修士）は本学の英語英文学専攻で修得しており、そこから英文で書かれた京都観光ガイドブック及び国際京都観光学の研究を志すに至っている。</p> <p>明治初期の京都は、戊辰戦争によって荒廃しており、また明治天皇の東京奠都によって精神的にも大きな打撃を受けていた。そこで京都の復興を託されたのが山本覚馬である。『管見』によって日本の未来のあるべき姿を描いた覚馬は、いくつかの施策を実行するが、その一つが京都博覧会の開催であった。海外との交易による産業の発展を視野に入れた覚馬は、京都の良さを外国人に紹介すべく、英文『京都とその近郊の案内』を作っている。その特徴は英文によるガイドブックであるのみならず、外国から取り寄せた印刷機による活字印刷であること、また挿絵はすべて銅版画にしていることがあげられる。本来なら木版が一般的であるが、覚馬は外国人に日本の印刷技術のレベルの高さを知らしめるために、あえてそうしたようである。</p> <p>千代間はこれを近代における国際的な京都観光の始発ととらえ、従来関心が薄かった英文『京都とその近郊の案内』を徹底的に調査分析している。これは山本覚馬の著作ということで、同志社及び京都の初期の歴史とも深くかかわるものなので、同志社女子大学にとって有益な研究成果といえる。またその副産物として、これまでほとんど知られていなかった丹羽圭介についての資料を発掘している点も高く評価できる。</p> <p>この日本人の手になる英文『京都とその近郊の案内』に続くものとして、千代間は外国人によるガイドブック二種をあげ、徹底的に比較研究を行っている。一つは『ストレイノート』であり、もう一つは『ツーリストガイド』である。これについても初版から改訂</p>			

版に至る違いを綿密に調査することで、『ツーリストガイド』が『ストレイノート』のダイジェスト版であることをつきとめている。




京都観光の具体例として、保津川下りと伏見稲荷大社をあげ、それがいかに外国人の興味を引いたかを、資料に基づいて論じている。特にアーネストサトウの活躍は読みごたえがあった。

なお本論文は副産物として、同志社の創設と京都の復興に尽力した山本覚馬の業績を顕彰していること、そしてこれまであまり光の当たらなかった丹羽圭介の事跡を掘り起こしていることも評価される。

以上により、審査員全員一致で本論文を博士論文に値するものと認定する。今後なるべく早くこの成果を研究書として公刊してもらいたい。

試問結果の要旨

2022年 8月 4日

学位申請者	千代間泉		
審査委員	主査	吉海直人	
	副査	森山由紀子	
	副査	A. エリオット	

(要旨)

本学大学院生の千代間泉から「英文ガイドブックの視点による国際観光黎明期の研究—明治期における京都観光の文化史的考察—」という論文名で、博士の学位の申請があった。これを受けて会議で審査委員が決められ、主査・吉海直人、副査・森山由紀子、副査・A.エリオットの三名で厳正に審査にあたった。

各委員には事前に申請論文の複写物が渡され、余裕をもって査読した後、8月4日に本学で公開の口頭試問会を開いた。その席上で申請者に対して論文内容の確認、ならびに各委員による忌憚のない質疑応答が60分余り行われた。各委員からの専門的な質問に対して、申請者は一つ一つ丁寧かつ適切に応答していた。この口頭試問を通して、申請者の学力・人物とも申し分ないことが確認できた。

申請論文については、研究の基礎が整っているとはいえない明治黎明期に出版された三種の英文ガイドブックを取り上げ、初版本の発掘から改訂版との比較検討を行っており、従来の研究を大きく塗りかえる成果をあげている。特に山本覚馬は同志社の創設者の一人であり、また京都府顧問として京都の復興に尽力した人物である。その覚馬によって出版された英文『京都とその近郊の案内』の初版を特定し、改訂版と比較することで、緻密な成果をあげている。またこれまで素性のわからなかった丹羽圭介について、新たに資料を掘り起こして論じており、これは同志社の歴史にも寄与するものといえる。

覚馬に続く『ツーリストガイド』や『ストレイノート』についても、初版・改訂版などを丹念に調べ上げることで、従来の研究史を超える成果をあげている。さらに具体例として、「保津川下り」や「伏見稲荷大社」をあげ、国際観光地となった経緯を資料に基づいて論じており、オリジナリティに富み、新見にあふれていることを確認した。

試問を通して申請論文が独創的かつ斬新なものであり、従来の観光学の研究史を大幅に塗りかえるものであることが確認できた。よって審査委員は全員一致で千代間泉の申請論文に対して博士（日本語日本文化）の学位を授与することを決定した。